恭也in川神

テク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恭也ｉｎ川神

【Ｎコード】
Ｎ３０７８Ｙ

【作者名】
テク

【あらすじ】
とらハの恭也ってまじこいに入れても違和感なさそうだったのでやってしまいました。しかしそのままだとマジこい勢が強すぎるため独自設定が多いです。ＫＹＯＵＹＡ成分もあります。でもヒロインは最初から決定しているのでハーレムにはなりません。あと、とらハらしく三角関係にするつもりなのでルート別とかになる予定です。脇キャラとしてとらハのキャラも出ますがメインはまじこいです。
一応とらハもまじこいも知らなくても大丈夫なようにしたいと思っ

ていますが、初投稿ということもあり文章も未熟なのでおかしな点やわからない点なども多いかもしれません。それでもいいと思った方はぜひ見ていってください。

恭也の・・・（前書き）

この小説には独自設定が多数あります。なのでキャラ崩壊なども出来るだけ抑えるつもりですが多分あります。なのでそういうのが嫌な方はご退出してください。
未熟な文かつ自己満足なところの多いこの話ですがそれでもいいという方はぜひ見ていってください。

恭也の・・・

現代の日本ではあまり見ることのできないほど大きな日本家屋、その中で二人の剣士が
戦っている。
戦っているのは成人男性、そしてもう片方はまだ小学校も卒業していないであろう
少年であった。
特徴的なのは、お互いの武器が一般的な刀ではなく小太刀、それも
二刀流であることだ。

永全不動八門一派・御神真刀流・小太刀二刀術、通称　御神流。

それが彼らの使う流派だ。
その歴史は古く、その時代の権力者の傍には常に御神の人間が居て、
守護していたと伝えられている。
現代では政治家や大企業の社長など護衛など主としており、拳銃な
どが現れ刀が廃れてしまった現代でなお最高のボディーガードとし
て知られている。

そして権力者から信頼されている一方、敵もまた多い。
それは敵対する権力者だけでなく、国際的なテロリストや御神流に
嫉妬する他の武家なども御神の人間を敵とし襲い掛かってくること
は珍しいことではない。

権力者を守るのが御神の人間ならば、それを守るのは御神の分家で
ある不破の役目
であった。
不破の人間も同じく御神流を扱うが、決定的に違うものがある。

御神が守るために刀を振るのなら、不破の人間は敵を殲滅するために刀を振る。
日本が平和になり現在では不破も御神と同じようにボディーガードをしているが、その心は昔も今も変わっていない。

そのため不破の人間は幼い頃から過酷な訓練をし、技術を磨いてきた。
今、道場で小太刀を激しく打ち合って戦っているのは二人とも不破の人間である。

成人男性の名は不破士郎。不破家の長男で当主になるはずだったが、弟である一臣にそれを譲り、自由に生きる男である。また現在の不破の人間の中で最強の剣士でもある。

少年の名は不破恭也。不破士郎の息子であり、不破の次期当主候補である。父である士郎が自由奔放の性格をしていて、それを反面教師として成長してしまったため、年齢に沿わないほど落ち着いた少年である。

傍目からは殺し合いをしているようにしか見えないほど真剣に戦っているが、二人にとってはいつものことなので気にしない。

「どうした恭也、息が切れてるぞ。まだまだ基礎体力が足りてないな。」

そう言いながら士郎は道場の床を一気に踏み込み、恭也に接近して二刀の小太刀で
切りかかった。
対する恭也はひるむことなく、士郎の小太刀に合わせるように自分の小太刀をぶつけて

ガードする。
しかし大人と子供の体格差を埋めることが出来ず、恭也は左手の小太刀を弾かれ手から
離れてしまう。
その隙を見逃さず、士郎は即座に恭也の腹に蹴りを放つ。

「くっ！！」

恭也はその蹴りに合わせて後ろに飛ぶが士郎の蹴りは恭也の予想以上に鋭く、吹き飛ばされた。
さらに追撃するために士郎は再び恭也に向かって走る。

その瞬間恭也の左手がぶれ、三つの黒い影が士郎に向かってきた。
士郎は一瞬目を見開き驚いたが、すぐに冷静になり両手の小太刀で影を全て叩き落とす。
そして士郎が恭也の方に目を向けると、いつの間には恭也の左手には先ほど士郎が
弾いた筈の小太刀が握られていて、再度驚いた。

恭也と小太刀の間にはかなりの距離があったにも関わらずなぜ、という疑問は士郎には
なかった。
なぜなら、御神流には小太刀だけでなく飛針や銅糸といった暗器の類も取り扱う流派
だからだ。
先ほどのは恭也が飛針を投げ牽制し、その隙に銅糸を落した小太刀に巻き付け自分の手の中に戻したのだ。
士郎はこの技術を知っているし、不破の当主候補であったので当然使えるのだから驚く理由は別にある。

「まだ飛針も銅糸も教えてないはずなんだが、誰に習ったんだ？」
士郎が驚いたのは、まだ教えていない技術を恭也が使ったからだった。
しかも暗器の類は扱いが難しく、実践で使うにはかなりの練習が必要なのだ。
それをかなりのレベルで使った恭也にいつの間に、という思いが大きかった。
それに対する恭也の返答は簡単なものだった。
「静馬さんも一臣さんもまだ早いと教えてくれなかったからな。見て覚えたものをこっそり練習したんだ。」
「おいおい・・・」
その言葉に士郎は冷や汗を流した。
いくら見たことがあるとはいえ、先ほどのは独学のレベルをはるかに超えていたからだ。
静馬とは御神の当主であり、御神流の師範でもある。また一臣は不破の当主であり、
士郎と共に御神流の師範代を務めている人物だ。
共に御神流最高の剣士として名を馳せており、特に静馬は御神の天才とまで呼ばれた
程の才をもつ。
だが士郎の記憶通りなら静馬ですら恭也の年齢でここまで強くなかったし、
成長もしていなかった。
かつてないほどの才能に士郎はわずかに恐怖し、それと同時にこれ

だけの才能をもった
息子を持てたことを嬉しく思った。

「恭也、構えろ。」

だからこそ士郎は、まだ幼い恭也に奥義を見せることを決意した。

「今からお前に奥義を打ち込む。防ごうとしなくていいからしっかり目を開いて見ておけ。」

その言葉を聞き、恭也の体に緊張が走る。
他の流派にとってどうか知らないが、御神流にとって奥義は多様してはいけないと
いわれている。
なぜなら向かってくる者は全て敵であり、それを見逃すことで対策を練られては護衛主を
危険に晒す可能性があるからだ。

だからこそ奥義を出すときは決めるとき、まさしく一撃必殺でなければいけない。
とはいえ昔と違い現在では他流派との交流もあることから全く見せないというわけでもない。
ただ一撃必殺の心を忘れるようなことだけは絶対にないといえる。
それを自分に向けて放つというのだから恭也が緊張するのも無理はない。

士郎と恭也の間には十メートルほど開いている。
恭也はほんのわずかな動きも見逃さないといった気持ちで士郎を見た。
そんな恭也を確認した士郎は小太刀をを鞘に戻し、腰を深く沈めた。

御神流奥義之一　虎切

士郎が一歩踏み込んだ瞬間、まるで道場全体が揺れたかのような爆発音が響いた。
初動から一気に恭也までの距離をゼロにした士郎は鞘に入れてあった小太刀を抜刀した。
恭也は小太刀を構えていたはずなのに士郎の刃は恭也の小太刀をすり抜け、そのまま
恭也の体を打ち抜き道場の壁まで吹き飛ばした。
士郎は恭也の傍まで近づき、声をかけた。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないが、怪我はしていない。父さんが上手く調整してくれたのか？」

「お前が少しでも防ぐ素振りを見せたらそこまで上手くはいかなかったがな。」

「そうか。」

その言葉に恭也は内心へこむ。
超高速抜刀術の中、自分に怪我をさせないようにする技量を見せられ、自分との差を感じたからだ。
とはいえ恭也と士郎の年齢を考えると当然で本来ならば悩むのも馬鹿らしいが、周囲の
強すぎる親戚達と自分を比べ、恭也は本気で自分には才能がないのでは、と不安になっていた。

「初めて奥義を受けてみてどうだった？」

士郎からの問いかけに恭也は考えていたことを隅に追いやり、先ほどの奥義について思い出していた。

「まず、最初の踏み込みに徹を足に使って爆発的な瞬発力を出していた。構えていたはずの小太刀がすり抜けたのは貫、そして最後に吹き飛ばされたのは徹だ。ただ本来は恐らく斬を使うのだろう。このことから奥義とは基本である斬、徹、貫を全て合わせたもののことを言うのではないのか？」

「正解だ。御神流の奥義は全て基本の三つからの派生形になる。そういう意味ではお前は恭也には使う資格がある。だがまだ体の出来ていないお前には負担の大きいから絶対に真似するな。今回見せたのも、お前が誰かの奥義を見て勝手に練習して体を壊してはいけないと思ったからだ。」

一を教えれば十を知る。
恭也はまさにそれだった。
先に注意をしておかなければ、本来ならあり得ないが、恭也の技に体が追いつかなく可能性があった。
すでに恭也は斬も徹も、信じられないことだが貫すら扱える。

技量もすでに並みの剣士を上回り、御神流の中でも確実に勝てるのは師範代候補以上の者だけであった。
これほどの才能を潰すわけにはいかない。
だからこそ念を押しておく。

「いつかちゃんと教えてやる。もう一度言うが絶対に一人で練習するなよ。」

「わかった。俺も基本が大事なことは理解しているし大丈夫だ。目先の技に憧れるほど子供じゃない。」

「十分子供だろうが。お前は一体誰に似たんだろうなぁ・・・」

「父さんじゃないことは間違いないな。いや、父さんを反面教師にして育ったんだからある意味父さんに似ているのか？」

親の背を見て育っていることを喜ぶべきか、反面教師にされていることに嘆くべきか悩む士郎だった。

「・・・・まあいいか。よし、今日の鍛錬はこれまで！！」

「ありがとうございました！！」

お互い武器を片付け、他にも鍛錬していた者達と道場の掃除を始める。

たとえ師範代でも関係なく、神聖な道場を使った後は平等に掃除をするのが士郎だ。

「そうだ、言い忘れていたが恭也。」

「なんだ？」

「来週から一年間、武者修行の旅に出るからな。準備しとけよ。」

武者修行という言葉に、心が動かされた。

幼くとも剣士である以上、様々な者と戦いたい願望が恭也にもある。

だがしかし、恭也はまだ小学生である。

学校は二日前から夏休みに突入していたが、もちろん一年間も休みなわけがない。
つまり常識的にありえない。
そして父を反面教師として学んできた恭也としてはこの提案を受けるわけにはいけなかった。
たとえ武者修行としても・・・たとえ武者修行だとしてもだ。

「学校はどうする？今はまだ義務教育だぞ。」

「休学届を出してきたから大丈夫だ！！」

大丈夫なわけがない。
今頃恭也のクラスの担任（２６）は泣いているのではないだろうか。

「父さん、ちょっとここで正座しようか・・・」

「きょ、恭也？」

恭也は武者修行という心躍る提案に一瞬でも期待し、そしてそれが叶わないであろうことを理解した瞬間、士郎に八つ当たりをすることを決めた。
そして八つ当たりをしていくうちにどんどんテンションが上がっていき、今までの鬱憤を晴らすかのように関係ないことまで説教し始めた。

曰く、なぜ長崎にいるのにいきなり北海道に行きたいなどと言うのか。
曰く、なぜ金がないのにギャンブルをして、しかも負けるのか。
曰く、なぜ俺には母さんがいないのか。
曰く、なぜ気がついた時にはイギリスやドイツといった外国にいる

ときがあるのか、しかも密入国で。

間に重い話も含まれているのは気のせいである。
なぜか逆らえないオーラをまとっている恭也に恐怖しながら、士郎は周囲に助けを求めるが誰も眼すら合わせない。
神は死んだ！！そう思った士郎に助けが入る。

「恭也君、士郎さんも反省してるしそれくらいにしてあげたら？」

恭也の後ろから声が聞こえた。
その言葉を聞き、振り返る。
年齢としてはまだ二十歳前後であり、黒髪を腰まで伸ばしてなぜが儚い印象を持たせるが、十分美人と言える女性であった。

「・・・琴絵さん」

「琴絵ちゃん、助けてくれ！！」

女性の名は御神琴絵という。
生まれたときから体が弱く御神流こそ習っていないが、心に一本の芯を持っており、御神流の誰からも認められている女性だ。
そして、恭也が最も逆らうことが出来ない人間だ。

「い、いくら琴絵さんの言葉でも・・・父さんにはもっと言ってやらないと。」

「でもほら見て。士郎さんも十分反省してるみたいよ？」

士郎は声こそ出さないが、残像が残るほど激しく首を縦に振っている。

「で、でも・・・」

「ね、恭也君。」

「は、はい・・・父さん、もういいよ。」

「よっしゃー!!琴絵ちゃん、ありがとう!!」

「そのかわり、父さんが勝手に休学届を出したことは御影さんに伝えとくからな!!」

「げっ!!それは反則だろ!!」

「知るか!!」

御影とは士郎の母で不破の元当主である。
この世で士郎が唯一苦手としている人物でもある。

「恭也君は偉いね。なでなで。」

恭也は恥ずかしいのか顔を赤くしてそっぽを向くが、おとなしく撫でられている。
このように普段は大人びている恭也が琴絵の前では年相応の態度を取っているのには理由がある。
母の愛情を知らずに育った恭也にとって琴絵は母であり姉であり、そして初恋の人でもある。
そして、実は恭也はいつか自分が立派な御神の剣士になったら琴絵に告白しようと決めていたりもする。

「ああ、そういえば琴絵ちゃんおめでとう。」

士郎が思い出したかのように声をかける。
それに対して琴絵もありがとうございます、と返した。
何のことかわからない恭也は士郎の方を見る。

「恭也は知らなかったか、実は琴絵ちゃんと一臣が婚約することになったんだ。」

「えっ！？婚・・・・約？」

恭也が動揺しているのにも気付かず士郎は我が身のことのように嬉しそうに語る。

「一臣は昔から琴絵ちゃんのことが好きだったからな。御神と不破は昔からの風習で政略結婚が多かったが、ちゃんと妹だけでなく弟も恋愛結婚ができてよかった。昔から琴絵ちゃんは妹みたいなものだったけど、これで名実ともに妹なわけだ。これからよろしくな。」

「ええ、よろしくお願いします。といっても元々親戚同士ですし関係が変わるものでもないですね。」

その後も士郎と琴絵は会話していたが、恭也の頭の中には入ってこなかった。
いつの間にか道場から自分の部屋に戻っていたことに気がついた恭也は、ようやく一人になったことで冷静になった。といっても自分が失恋したということを再確認しただけだが。

「大好きな人が幸せになる、これほど嬉しいことはないではないか。」

そう呟いてみるが、それで心が満たされることはなかった。
それでも祝福はしよう。あんなに幸せそうな琴絵さんは今まで見たことがなかったのだから。
そう思い、恭也は布団に入り目を閉じる。
そうすると今までの琴絵との思い出ばかり頭に浮かぶ。
そして恭也の目から涙が零れ始めた。

翌日、朝の鍛錬に恭也は来なかった。
これは恭也が鍛錬を始めてから初めてのことだった。
士郎は恭也が琴絵に抱いている感情は母に対するようなものだと思っていた。
だからこそどうせすぐに知ることになるだろうと軽い気持ちで婚約話をしたのだったのだが・・・

「まさかここまでだったとは・・・」

朝ごはんの時間なっても姿を現わさなかったため、恭也の部屋まで呼びにきた。
ノックをして呼んでみるも返事ひとつ返ってこない。
それどころか部屋の中から人の気配がしないことから、焦った士郎は勝手に入ることにした。
鍵がかかっていたが、士郎の特技の中にはピッキングがあるので問題にならなかった。

部屋に入ると布団はきちんと畳まれており、やはり恭也はいなかった。

「一体どこに行ったんだ？」

何か手掛かりになるものはないか士郎は探し始めた。
恭也の部屋には無駄なものがほとんどなく、それはすぐ見つかった。

「手紙・・・何々・・・・・」

『自分には技術よりもなによりも心が未熟だとわかりました。しばらく武者修行の旅に出ます。探さないでください。』

「武者修行の旅って昨日あれだけ怒られた俺の立場は！！ていうか結局これって失恋したから家出しただけだろ！！」

『ＰＳ．御影さんへ
父さんが俺を勝手に一年間休学させて武者修行の旅に出そうとしていたので叱っといてください。』

「お前結構余裕あるだろ！！」

こうして恭也は御神の家から消えた。

おまけ

「とりあえずこの手紙は燃やそう。」

「なんて書いてあるんだい？」

「ああ、御影ババアに俺が恭也を勝手に休学させたこと叱っとけ・・・って御影ババア！！」

「ほう・・・それで覚悟は出来てるんだろうね！！」

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

「ちゃんと恭也を見つけて来るまで帰ってこなくていいからね！！」

そういって御影はぼろ雑巾のようになった士郎を引き摺り、家の外に捨てた。

恭也の・・・（後書き）

書いてみて初めて分かる難しさですね。他の作家さんたちを尊敬します。

この設定はやはり無茶が多いため批判を受けやすいのではないかと思っている作者です。ですので批判とかはきちんと受け止めようと思っています。ですがやっぱりできればいい感想とかもらえると嬉しいです。ちなみに御神流は独自設定が特に多いです。

それでは未熟な文をここまで読んでいただきありがとうございます。

川神へ行く（前書き）

すでにお気に入り登録してくれている方がいるようで作者は嬉しいです。おおまかな話の流れはあるものの見切り発車の部分も多く色々見苦しい部分もあると思いますがこれからも見捨てずに見てくれると嬉しいです。

川神へ行く

恭也にとって旅とは初めてのことではなかった。

物心がついたときには士郎に連れられて旅に出ていたし、不破の家に戻った後も何度か旅に出ていた。

士郎はいつも気まぐれで目的地を決めずに進み、しかもお金もないので野宿になることも多かったため恭也の旅のスキルはどんどん上がっていった。

今回のように恭也一人で旅に出るのは初めてだが、士郎に振り回されない分いつもよりもむしろ楽なんじゃないかとすら思っていた。

実際、恭也は家を出てすぐに目的地やそこに行くまでの経路をきちんと調べたため、四日で目的地まで到着した。

これがもし士郎と一緒の旅であったら寄り道ばかりで一向に目的地まで着かなかっただろう。

ちなみに恭也は親戚が多いことから毎年かなりの額のお年玉をもらっており、また修行ばかりで特にお金のかかる趣味もなく使わないので一般的な子供に比べてかなりお金を持っている。

修行の旅ということで、移動の手段も徒歩なのでお金に余裕があり餓える心配も今のところない。

目的地の名前は川神市。

関東の南にある政令指定都市で人口第９位。

市の北端には多馬川が流れ東京都との境となっており、東部には東京湾が広がっている。

江戸時代から栄えていた歴史のある街で武家も多く、馬も多かったことから川に多馬の名がついた。

古くからの閑静な住宅地が多いがここ数十年で川神の駅周辺は東京との近さから一気に近代化が進み、若者の街と呼ばれるようになった。

もちろん恭也がこの街を訪れたのは観光のためではない。

武術の総本山として有名であり、世界最強の武人である川神鉄心が総代を務める川神院を訪れることがこの旅における恭也の目的だった。

本当は剣聖とまで言われた黛十一段も訪ねたかったが流石に石川県は遠く今回は諦めた。

「しかし着いたはいいが、ずいぶん遅くなってしまったな。」

すでに日は暮れ、周りの家の電気も消えてしまっている。

こんな時間に訪れても相手に迷惑だろうと考える。

仕方ないと思い、恭也はいつものように野宿出来る場所を探して歩き始めた。

ちなみにこの野宿出来る場所というのは公園などではなく、警察に見つかって家に連絡されると困るため出来るだけ人目につかない場所のことをいう。

朝日が差し込み恭也が目を覚ます。

昨夜恭也が野宿する場所として選んだのは、河川敷の近くにある原

っぱだった。
奥の方は土管があり、外からは見えないようになっていたことが決め手となった。
夏ということもあり虫が寄ってこないように害虫対策もしっかりしていたので草むらの中でも虫に刺されることはなかった。
野宿の用意を片付け、朝の鍛錬を終えた恭也は当初の目的通り川神院に向かおうとするが、誰かが近づいてくる気配がしたため警戒する。

「おいお前は誰だ！！ここは俺たちの秘密基地だぞぉ！！」

近づいてきたのは頭にバンダナを着けた少年だった。
恭也は警察ではなく、自分と同じくらいの年齢だったため警戒を解いた。

「すまない。ここが誰かの場所だなんて知らなかったんだ。」

「うそつけ！！この辺のやつでここが俺達の場所であることを知らない奴なんていないんだぞ！！さては最近またこの場所を狙い始めたトニーか桜田一家、もしくは田中鈴木佐藤連合のスパイだな！！」

「トニーも桜田一家もなんとか連合も知らない。もちろん他のところのスパイなんかでもないし本当に知らなかったんだ。」

「・・・確かにこの辺りで見たことないけど・・・でも俺は騙されないぜ！！スパイじゃないなら証拠を見せてみろよ！！」

「証拠といわれても・・・こんなものしかないが・・・」

そう言いながら恭也は先ほど片付けた寝袋などを再び取り出し少年に見せる。

「おおぅ！？これってもしかして冒険の道具か！？」

恭也が取り出した道具を見た少年は目をきらきらさせながら恭也に迫る。

「冒険・・・まあ間違っていないがどちらかと言えば旅の道具だな。」

「旅か！！くぅ～男のロマンだぜ！！」

「これで信じてもらえたか？」

「ああ、もちろん！！疑って悪かったな！！」

「いやこちらも知らなかったとはいえ勝手に場所借りてしまったんだ。謝るのはむしろ俺の方だ。」

「知らなかったんだから仕方ないさ！！それよりお前いいやつだな！！俺の名前は風間翔一！！風のように自由に生きる男だ！！」

そう言って少年・・・風間翔一は笑顔で手を差し出した。

「不破恭也だ。」

恭也もその手の意味を勘違いすることもなく、軽く笑みを浮かべながらしっかり握り返した。

お互い自己紹介を済ませた後、年齢も近いこともあり二人は話し始

めた。

「それにしても恭也って俺と同じくらいなのに一人旅ってすげぇな！！なあなあ、何で旅してんだ！？」

「今年で１１歳になる。旅の理由か・・・己の心を鍛えなおすためだな。」

（失恋して家に居づらかったというのが本音だが、流石にそれを言うのは情けない）

「かっけぇー！！ちなみにこの街に来た理由は！？」

「この街には川神院という武術の総本山があるだろう。それに他にも武家が多いと聞くし修行するにはちょうどいいと思ったからだ。」

「あぁ～、モモ先輩の家か。んっ？てことはなにか武術をやってるのか？」

「実家で剣術を少しやっている。モモ先輩というともしかして知り合いに川神院の関係者がいるのか？」

「ああ！！モモ先輩は川神百代って言って次期川神院の後継者らしいぜ。ちなみにメチャメチャ強くて怖い！！あ、間違っても俺がそんなこと言ったなんて本人の目の前で言うなよ！！殺されちまう！！」

その言葉を聞いて恭也はにやりと笑う。

「ああ、任せておけ。」

「だあ～！！お前言うつもりだろ！！マジで勘弁してくれ！！」

「冗談だ。」

「絶対冗談じゃなかった・・・こうなったらなに言われるか心配だし俺も恭也に着いていくからな！！それに初めて川神に来たんなら案内もいるんじゃねえの？」

「それは助かるが・・・いいのか？」

「いいっていいって。俺達もう友達だろ！！」

「友・・・達・・・！！」

「ん？なんだその反応？」

「いや・・・今まで剣の修行ばかりで友達と呼べるやつが一人もいなかったから・・・少し驚いた・・・」

「一人もって嘘だろ！！学校は！？」

「朝早くから修行をしてるから学校ではほとんど寝ている。終われば また修行だから周りが遊びに行くのはよく見るが俺はすぐに家に帰る。」

「そりゃ友達も出来ないな・・・まあでもそんなの関係ねぇや！！ それじゃあ俺が恭也の友達第一号だな！！」

「・・・・・・・・・・・」

「どうした？」

「友達なんて初めてだから・・・どういう反応すればいいかわからん・・・」

「そんなもん決まってらぁ！！笑えばいいんだよ！！」

「・・・・これでいいか？」

恭也は滅多に見せない年相応の笑顔で風間に応えた。

「おう！！それじゃあさっそく川神院に行くか！！」

「ああ、頼む。」

「よ～し！！俺についてこい！！」

そう言うと風間はものすごい速さで走り出した。

川神院

関東三山の一つ厄除けの寺院として名高く市の名前になるほど。

『己を高め気力で厄をも祓う』という考え方で武道の鍛錬場所としても有名である。

「着いたぜ！！ここが川神院だ！！」

「ここが・・・確かに中から強い気をいくつか感じるな。」

しかし言葉とは裏腹に、恭也は内心がっかりしていた。
中から感じる気は御神流の門下と比べ小さく、昔士郎と共に回った一般的な武家とそう変わらないものだったからだ。

「そんなんわかるのか？そういやモモ先輩も気配とか探れるって言ってたな。」

「しかしいきなり部外者の俺が入っていいものなのだろうか？」

「いいんじゃね。モモ先輩も挑戦者は大歓迎って言ってたし。てことで・・・たのもー！！」

風間が大声を出すと、門の中から四十代ぐらいの男が出てきた。
気配を抑えているためどれほどの強さか恭也にはわからなかったが、鍛練を重ねていることは一目でわかった。

「おや、風間君じゃないか。百代様なら遊んで来ると言って出て行ってしまったよ。」

「ああ、いいのいいの。今日はモモ先輩じゃなくてこっちがメインだから。」

「ふむ・・・君は？」

「初めまして、不破恭也と申します。己の心が未熟であることを感じ、武術界において最強とまで謳われた川神鉄心殿のお話を聞いてみたい思い訪れました。」

「これはご丁寧に・・・私は八神孝です。不破というとあの不破かな？」

「おそらく、その不破です。」

「ということは不破士郎という者をご存じかな？」

「父ですが・・・もしや父はまた何かやらかしたのでしょうか！！」

「いやいや、昔彼も訪れたことがあったから知っているだけだよ。」

「しかし川神院にはかなりの武術家が訪れるとのこと。その中で父のことを覚えているなど何かしたとしか思えません。」

「息子さんは彼のことを全く信用していないんだね・・・彼は当時川神院に赤ん坊を背負って道場破りに来てね、自分が勝てばご飯と宿をくれと言ってきたから印象に残ったんだ。そういえば丁度十年くらい前だし君がその時の赤ん坊みたいだね。」

「その節は父が迷惑をかけて申し訳ありません。」

「迷惑だなんて。彼は非常に楽しい性格をしているしすぐに院の者達とも仲良くなったんだ。」

「ということは父が勝ったのですか？」

「当時の師範代の一人と戦って最後は引き分けだったんだ。世界中から様々な者が川神院には訪れるが、彼より強い挑戦者は未だに訪れていないなぁ。まあ、お互い強さを認め合ったみたいで意気投合

してしばらく川神院に滞在していたんだよ。」

性格は全く信用していないが士郎の高い実力をよく知っている恭也は、父と互角に戦ったという話を聞き川神院の評価が高くなった。

「なんだぁ、恭也は川神院に来たことあったのか？」

「話を聞く限り赤ん坊の時に来たことがあったらしい。」

「そういえば風間君、百代様は君達と遊ぶ予定だったみたいだけどいいのかな？」

「あ～！！そういや今日はみんなでサッカーするんだった！！モモ先輩もいないみたいだし悪いけど俺はもう行くわ！！」

「ああ、ここまで案内してくれてありがとう。」

「いいってことよ！！あっ、しばらくは川神にいるつもりなんだろ！！なら用事が済んだらさっきの原っぱに来いよ！！俺の仲間達を紹介するから！！」

「ああ、必ず行かせてもらう。」

「んじゃまた後でな～！！うぉぉぉぉ、強風暴風台風突風旋風烈風疾風怒涛！！！！！風をとらえられるものなどこの世に存在しない！！」

風間はそう叫ぶと走りだし、一瞬で見えなくなった。

そんな風間を八神は穏やかな顔で見送る。

「相変わらず元気な子だ。あんな子達と一緒にいる間は百代様も大丈夫だろうな・・・」

「ところで、突然の訪問となってしまったのですが・・・川神鉄心殿にはお会い出来るのでしょうか？」

「恐らく大丈夫だと思うよ。総代も学校が夏休みの間はほとんど川神院にいるようだし。さ、おいで。」

「それでは失礼します。」

恭也は八神に連れられて川神院の中へと入って行った。

八神に案内された部屋でしばらく待つように言われた恭也は周囲の気配を探るため集中した。

門の中に入った瞬間、外で感じた以上に気配が強くなったからだ。

恭也は最初驚いたが気は使い方次第で様々なことができることを知っていたため、門を境に結界が張られていたのだろうと推測した。

その気の強さは御神流と比較しても遜色なく、中には自分の見てきた武士の中でも最強であった士郎や静馬クラスの者もいた。

ちなみに気の使い方は流派によって異なるが、身体能力の向上や武

器に気を通して強化などが多く、恭也もこのような使い方をしている。
恭也はまだ使えないが御神流では脳のリミッターを自力で外すことができ、その際に負担を極限まで下げることなどに使っている。

「！！」

そうして気配探知に集中していた恭也のすぐ後ろで突如、人間とは思えないほど膨大な気を感じた。
恭也は咄嗟に身を翻すと同時に頭の中で逃走を考える。
普段の恭也であれば敵でないことくらい分かり逃走など考えないが、集中して気配探知していたにも関わらず背後をとられ、更に初めて感じる圧倒的強者の気配に冷静さが欠けてしまっていた。
背中に汗を掻きながら、どんな人物か確認する。

「ふぉふぉふぉ、若いのにいい反応じゃ。」

そこにいたのはすでに気を抑えた老人だった。
しかし見た目で侮ることなど今の恭也にはとても出来るものではなかった。
先ほど一瞬出した気配はとても同じ人間とは思えないほどのもので、しかも今はそれを感じさせない。
それはあれほど莫大な気を精密にコントロールしている証拠なのだからだ。
これほどのことが出来る人物は恐らく世界中探しても二人といないだろうとのことから、恭也はこの人物が誰か予想できた。

「あなたが川神鉄心殿ですか？」

「うむ、いかにも。そういうお主は不破のところの倅で間違いないかの？」

「はい、不破恭也と申します。この度は突然の訪問にも関わらず会って頂きありがとうございます。」

「うむ、礼儀正しくて実によろしい。・・・百代に見習わせたいのぉ。ところで八神から話は聞いておるが、ワシの話を聞きたいとな？」

「はい。・・・実は先日、自分の心が未熟であることを再確認する出来事がありました。そして武神と謳われたあなたならこの迷いを断ち切ることが出来るのではないかと思い、今回は訪ねさせて頂きました。」

「お主の年齢を考えれば未熟であることなど当り前じゃが・・・話してみなさい。若者の悩みを聞くのも年寄りの義務じゃからな。」

恭也は川神院に訪れる経緯を全て話した。

「なるほどのぉ・・・話はわかった。」

（随分と大人びた子どもかと思ったが・・・年相応の面もあるのぉ）

「まず最初に言っておこう。それはお主の心は未熟であるというわけではない。」

「しかし、涙を流すなど・・・」

「喝！！！」

「！！」

鉄心が叫んだ瞬間、日本で震度３の地震が起きた。

のちにこの話を聞いた気象予報士は「またＫＡＷＡＫＡＭＩか。」と呟いたそうだ。

「話を聞きなさい。男には涙を流していいときが３つある。家族や仲間が死んだとき、夢を叶えたとき、そして・・・・惚れた女に振られたときじゃ！！！！！」

「・・・・・・・・・」

「悔しかったじゃろう・・・・悲しかったじゃろう・・・・じゃが人間とはそうやって悲しみや悔しさをバネに成長していくんじゃ。そして今、お主の心はまさに成長しておる。わしとて生まれたときから武神であったわけじゃない。人生の中で何度も泣いた・・・そしてその度に友に助けられて今のわしがあるのじゃ。お主にとって今一番必要なのは心の修行ではなく、お主の心を理解してくれる友であろうな。」

「友・・・・・」

友と聞いて恭也が思い出すのは先ほど出会った少年、風間であった。

「うむ。お主にも友と呼べる者がいるようじゃな。ならばわしのような老いぼれに話を聞くよりその者に相談してみるがよい。きっと力になってくれるに違いない。」

そういうと鉄心は立ち上がり、出口に向かって行った。

「行きなさい！！そして強くなるがいい！！」

太陽に照らされた鉄心は、恭也の目から見ても眩しかった。

おまけ

士郎は恭也を探すついでに、イギリス上院議員のであり親友でもあるアルバートのボディーガードのためホテル・グランシール東京に訪れていた。

「なんだこのシュークリームは！！！美味い、美味すぎる！！店員、今すぐこのシュークリームを作った人を呼んでくれ！！」

そういうと、厨房の中から一人の女性が現れた。

「私がチーフパティシエの高町桃子です。」

「結婚してください！！」

「よさんかみっともない！！」

士郎はアルバートに頭を叩かれ連れて行かれた。

川神へ行く（後書き）

今回初めてまじこいキャラが登場しました。上手くキャラの特徴を掴めているといいのですが・・・難しいですね。
あと今回出てきた八神はオリジナルの脇キャラです。そんなに重要なキャラではないですが恭也に対する説明ポジションってことで何回かでます。ちなみに鉄心さんは若い頃から女関係でよく泣かされています。なのでこの話題に関してはかなり優しかったりします。
それではここまで読んでいただきありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3078y/

恭也in川神

2011年11月8日03時10分発行